特別優秀賞

そうじのお兄さん

香川県　林田小学校　三年
三村　奏太

夜中、ぼくはきゅうきゅう車で運ばれた。
「ぼく、わかる？　お名前言えるかな?」と、病院の先生が聞いた。
お母さんも、何度もぼくの名前をよんで、ほっぺたをさわったけれど、ぼくは返事をしなかったそうだ。ぼくは１カ月入いんした。
コロナのせいで、お見まいはきん止だった。病院のプレイルームもしまっていた。学校もサッカーも行けないし、だれとも遊ぶことができなくて、ぼくは悲しかった。
ぼくの部屋には、毎日そうじのお兄さんがやってきた。いつも元気に、
「おはようございます。おそうじにきました。」
と言って、部屋をピカピカにしてくれた。お兄さんがはじめて来たとき、ぼくはまだ元気がなくて話すことができなかった。お兄さんは、部屋においていたきょうりゅうの人形を見て、
「おっ、ティラノサウルスや。かっこいいな。」
と言った。ぼくが返事をしなくても、お兄さんは毎日声をかけてくれた。そうじの人なのに、どうしてこんなに話をしてくれるんだろう、と思った。
「いい天気やなあ。元気になったら何する?」と聞かれたときは、外を見ながら考えた。
「虫とり。」と答えると、
「兄ちゃんも、虫すきやで。」と言って、カブトムシの話をしてくれた。べつの日には、すきな動物の話をして、カピバラの写真を見せてくれた。ぼくは、お兄さんと会えるのが、楽しみになっていった。
クリスマスの日、ぼくはおり紙でたくさんサンタさんを作った。病院のみんなに、プレゼントしたかった。お兄さんには、ぼくのすきなエメラルドグリーンのサンタに『そうじありがとう』と書いた。
お兄さんは、
「うわっ、かっこいい。ありがとなあ。」とよろこんでくれた。けれど、サンタをつくえの上においたまま、そうじをしていた。
「ポケットに入れないの?」とぼくが聞くと、お兄さんは、
「ポケットに入れたら、クシャクシャになるけん。心のこもった物は、大切にしたいんや。」
と言って、自分のバックに入れていた。お兄さんは、心のやさしい人だと思った。
「部屋をきれいにしてもらうだけじゃなくて、心まで温かくしてもらったね。」
と、お母さんが言った。ぼくもそう思った。
お兄さんは、ぼくを元気にしようとしてくれた。お兄さんの話は、点てきと同じくらいぼくにパワーをくれたと思う。ぼくも、友だちや家族の心を元気にできる人になりたいなあと思った。
ぼくがたい院するとき、お兄さんは休みで、さようならをすることができなかった。だからぼくは、この作文を書こうと思った。
お兄さん、やさしい気持ちをありがとう。